

川崎市多文化共生社会推進協議会
令和7年度第1回地域日本語教育の推進に関する部会 議事録

会議名	川崎市多文化共生社会推進協議会 令和7年度第1回地域日本語教育の推進に関する部会	
日時	令和7(2025)年6月24日(火) 午前10時00分～午前11時50分	
場所	川崎市役所 本庁舎復元棟 3階301会議室	
出席した者の氏名	部会委員	神吉 宇一 委員 (武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科 教授) 塩川 克久 委員 (公益財団法人川崎市産業振興財団 産業支援部長) 丹野 清人 委員 (東京都立大学人文社会学部人間社会学科 教授) 原 千代子 委員 (社会福祉法人青丘社 理事・事務局長) 南 昭子 委員 (公益財団法人川崎市国際交流協会 常務理事・事務局長) 吉田 聖子 委員 (公益財団法人川崎市国際交流協会 評議員、人材育成コーディネーター)
	オブザーバー	公益財団法人川崎市国際交流協会交流事業課 課長 安藤 雅子 経済労働局労働雇用部 担当課長 加藤 行一郎
	事務局	市民文化局市民生活部多文化共生推進課 課長 小出 博美 " 担当課長 吉留 瑞穂 " 課長補佐 松長根 直樹 " 課長補佐 三田村 有美 " 総括コーディネーター 廣田 智香子
欠席者の氏名	加藤 正毅 委員 (学校法人深堀学園 外語ビジネス専門学校 副校長) 河野 眞吾 委員 (技能実習監理団体 日本さくら協同組合 事業部長) 教育委員会事務局教育政策室 担当係長 川上 克哉 教育委員会事務局生涯学習部生涯学習推進課 担当係長 仲田 浩	
議事及び公開・非公開の別	議事 (公開) 1 開 会 2 委嘱状交付 3 議 事 (1) 川崎市地域日本語教育推進方針の進捗について (2) 今年度の事業等について (3) 今後の審議計画・スケジュールについて 4 その他	
傍聴者	0名	
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 座席表 ・ 部会委員名簿 (資料1) 「川崎市地域日本語教育推進方針」施策の取組内容一覧 (資料2) ゼロビギナー向け短期集中日本語講座担当 日本語講師準備講座募集要項 (資料3) 令和7年度川崎市ゼロビギナー向け短期集中日本語講座 (資料4) キャリアアップのための日本語講座 (資料5) 令和7年度川崎市地域日本語教育スキルアップ講座 (案) (資料6) 令和7年度川崎市地域日本語教育シンポジウム (案) (資料7) 地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業関連スケジュール (案) (参考資料1) 川崎市外国人市民意識実態調査報告書 (参考資料2) 令和5年度地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業 事例報告書 (参考資料3) 令和6(2024)年度教育文化会館・市民館活動報告書 (抄)	

(参考資料4) 外国につながるのある児童生徒の状況と支援について (参考資料5) 川崎市国際交流センター令和6年度事業報告書(抄) (参考資料6) 川崎市多文化共生社会推進指針 抜粋

■南委員(部会長)

皆さん、こんにちは。先生によってはお時間に限りがある方もいらっしゃるということですので、円滑な進行、御協力のほうよろしく願いいたします。それでは、議事に沿って進めてまいります。

(1) 川崎市地域日本語教育推進方針の進捗について、事務局から説明をお願いいたします。

■松長根課長補佐

資料1 川崎市地域日本語教育推進方針の進捗について、説明

■南委員(部会長)

それでは、今の御説明に対して、御意見と御質問ありましたら、お願いいたします。

■丹野委員

こども未来局からは回答がなかったのですか。

■松長根課長補佐

回答はなかったです。

■丹野委員

こども家庭庁から予算がついているはずだけど。こども家庭庁からヤングケアラーの支援体制と、あとそうした子どもがいる家庭に対する通訳予算等々で、ヤングケアラー支援では政令市に対しては792万円、これは補助額の割合3分の2です。だから3分の1は市で用意しなければいけないという形になりますけど、困難な家庭としての外国人に対するものとして、川崎だと児相3つありますものね。だから児相1か所当たりについて272万5,000円がつくという補助があるみたいなのですが、応募しないのはもったいない。

■吉留担当課長

その補助金というのは、全部ヤングケアラー用ですか。何か日本語にも関わるようなものでしょうか。

■丹野委員

ヤングケアラーの場合に当たる、あとそのほかだと、それこそ、こども家庭庁関連だと、こども家庭庁からの外国人家庭に対しての通訳派遣の事業があって、それが453万4,000円、各自治体に対しては。それは2分の1補助です。だから、全市を挙げて取れるところがあるのだったら取ってくれよと尻を引っぱたいてください。

■南委員(部会長)

15局区に照会し、6局区しか回答なかったけれども、もしかすると、この照会の仕方というか、聞き方で結果として自分のところと関係あると思えなかったこともあるのでは。もしかしたら既にやっているけど、ここで答えるほどではないと思ってしまったかもしれないし、追っかけて行って、回答のなかったところが実際どうだったのかみたいこともフォローしていただけたらいいと思います。

■吉留担当課長

承知しました。

■原委員

この調査は毎年やってきたものですか。

■吉留担当課長

今回初めて調査依頼をしています。今後は毎年照会していく予定で考えています。

■原委員

外国人市民意識実態調査など、そういう関連の資料は色々出ていたと思うのですが、各局に照会したというのは、今まであまり記憶がなかったのです。でも、行政の施策を全体的に考えるというのが課題だと思うので、とてもよかったのではないかと思います。そもそも市民文化局多文化共生推進課の役割としては、ぜひ、各局を調整しながら、政策をやっていくという部分が重要なと思うので。また、そういう中で現実の政策については、15局に照会し、6局からの回答しかなかった話が出ていましたけど、ほかの局も例えばヤングケアラーの問題や児童相談所の問題は、ふれあい館はすごく児童相談所から個別にたくさん相談が入っていて、常勤のコーディネーターが色々な相談に対応しています。それは特に予算もなく、緊急の課題だから、指定管理業務の範囲内で行っていますけど、すごく重いケースが多いです。それは、こども未来局というよりは、区役所の保健福祉センターのケースワーカーたちが動き回っていて、児童相談所のケースワーカーとふれあい館の多言語通訳できる人を含めて動いていると思います。そういう課題も予算がつくという情報提供があれば、児童相談所も色々考えるのではないかと思います。今は、本当にレアなケースで、通訳もいるから、ふれあい館に相談があるのですが、ふれあい館の本来業務もありながら、相談業務も出てくるので、正直言って負担はあるかと思っています。なので、またそういうことも庁内の色々な部署に調査の結果として発信していただければいいかなと思いました。

■丹野委員

昨日、南児相の指導支援課長と会いましたが、ふれあい館は第二の児相だと言っていました。だから、児相に行く一步手前の人があるふれあい館にとどまって、ふれあい館で持てないという人が児相に来るとい、そういう立てつけで現実に動かしてしまっているから、ふれあい館には申し訳ないと。

■原委員

内容として本当にイレギュラーというか、重いケースが多いので、ふれあい館の人も事業化に向けて外に向かって言う場がないですね。ただ、外郭の予算がつけば、後ほど話しますけど、多言語スタッフで相談活動に巻き込まれ始めている方たちもいるので、また違った形で予算を上乗せしての取組になったほうが全体的には子供たちや保護者も救われていくかなと思います。

■吉田委員

せっかく、いい調査をなさったので、15局区に対して、このような回答結果になりましたというのは送られたのでしょうか。

■吉留担当課長

これからとなります。

■吉田委員

これだけの回答がありましたが、他の局から今年度でなかったのは残念なので来年度は、という流れになるような。他局の事例を見れば、うちだってこのぐらいのことはやっていますというのが、また出てくるかもしれませんので、そういったことも随時ポータルサイトに上げていただけるといいかなと思います。

■南委員（部会長）

この調査結果が拡大方向になるよう、活用するために一工夫していただくということでもよろしいですか。次の議題に進みますが、よろしいですか。それでは、(2)の今年度の事業等について、事務局からの御説明をお願いいたします。まずは、ゼロビギナーですね。こちらをお願いいたします。

■ 廣田総括コーディネーター

(資料2) ゼロビギナー向け短期集中日本語講座担当 日本語講師準備講座募集要項

(資料3) 令和7年度川崎市ゼロビギナー向け短期集中日本語講座について説明

■南委員（部会長）

ただいま資料2、資料3について御説明ありましたが、御質問や御意見がありましたら、お願いします。

■吉田委員

この事業は目的として、前年度の調査の結果に基づいてゼロビギナーの人たちに対する学習支援が必要ではないか、その時に、どの部分が欠けているのかということを経典コーディネーターと地域日本語教育コーディネーターで昨年検討したところ、短期集中の講座がないと。国際交流センターや各市民館で、地域的には全部押さえられていますし、昼と夜という形でそれも全部あるのですけれども、日本に来たばかりの方が、まず日本語を身につけたいと思ったときに、1年くらい通えばお買物できますでは、間に合わないだろうと。そういう意味で集中した講座ができないかなということで、短期集中講座の企画をさせていただきました。幸い講師の募集をかけたところ21名応募があり、その中に登録日本語教員の方たちもいらっしゃいます。ほとんどの方が国際交流センターで、既に人材養成をされている日本語教師経歴の長い方、地域日本語教育に知見を持った方たち、それからあと若干名、市民館で活動中の方という形になりました。

こうやって見ていくと、いかに、普段から川崎市の日本語教育で国際交流協会であるとか、市民館の中でされている入門講座とか、それからブラッシュアップ講座の効果が出ているとかと、そういう方たちの意識が高いということがすごくよく分かったので、その方たちに活躍していただきたいと考えてはいるのですが、何分にも今のところ学習希望者が2名なので、学習希望者がどれだけ続いてくれるかというようなことから、ゼロビギナーの希望がないのか、ニーズがないのか、その辺りのところを見極めるのが、この講座の大きな目的となっています。

■原委員

募集の中身としては、10回全部出席を求めているのですか。やさしい日本語のチラシの中では、はっきり分からないです。10回必ず出ないといけないのですか。

■廣田総括コーディネーター

1回目から10回目まで内容も考えていて、10回全部出席して、日本語が少しできるレベルになっていますので、全て参加していただくということを考えております。

■原委員

もしくは全部参加でない人がいてもいいのではないかという感じですか。

■廣田総括コーディネーター

学習者の条件に当てはまりますと申込フォームに書いてあるのですが、そこに10回参加できる方と付け加えようと思います。

■吉田委員

QRコードを読まないで申込フォームに行けないので、そこに入ると、もう少し詳しく書いてありますよね。このチラシの、特に表面を見ると、いつなのかもよく分からない。とにかくQRコードを読んでもらえばということで、よろしいですか。

■吉留担当課長

いただいた御意見も踏まえて、QRコードを読んで申込フォームでもう少し詳しく記載し、10回出るようにということも加えて分かるように修正したいと思っております。

■丹野委員

ゼロビギナーの場合は、10回全部来てもらうということももちろんですし、それができれば一番いいのですが、まずは出てきてもらう。市がやっているところに来ることに慣れてもらうきっかけというようなイメージで、ある意味、間口を広く取るような気持ちでやったほうが、つながっていく。絶対ドロップアウトする人もいると思うが、そのドロップアウトした人が、今回は駄目だったけど次回はちゃんとやってみようとか、もうこれでこりごりとならないような、そういうのを伝えてあげたほうがいいのかなという気がします。

■吉留担当課長

注意書きの書き方ですね。絶対来てと書いていると、怖いかなという感じですかね。

■丹野委員

とにかく来てねということと、来たらやってあげるといふ、そこを前面に出して、来なくてはいけないといふのをあまり強く出さない方がよいと思う。特に初めての人なので、どちらかといふと来やすい、声をかけやすいといふような、そういうところを前面に出していったほうが、後々につながっていくのかなと思う。お子さんとかそういうところも関係してくると思いますから、お母さんが気持ちよく行けたということになると、子供も行かせてみようとか、色々なことにつながっていくと思います。お母さんが駄目となってしまうとき、家族中でちょっと厳しいなとなってしまう。とにかく一番初めのところはソフトに、ソフトにと、ただ甘やかしてもいけないですけどね。

■吉留担当課長

来てくれてありがとうといふところからですね。その雰囲気づくりも含めて注意してまいります。

■南委員（部会長）

2名の方が応募してくれた講師ですけれども、実際に通っていただけるのは8名ということで、通っていただけない方は、もったいないと思うのですが、その後、どういふふうにご方たちにはフォローがあったりするのですか。

■廣田総括コーディネーター

市の事業を紹介、案内してよろしいかどうか、不採用といひますか、通知のところ明記しまして、ほとんどの方が市の事業に関心を持っているので、今後の事業についての御案内ですとか、何か参加できるものがあれば、お声がけさせていただき、つなげていきたいと思ひています。

■南委員（部会長）

分かりました。ほかよろしいでしょうか。

■原委員

この講師養成講座を受けた方がゼロビギナーの講座に関わるのですか。

■吉田委員

養成といふよりも準備講座なので、既に応募されている学習者に合わせて講座を組んでいると、先ほど丹野委員がおっしゃったような気持ちよく、楽しく参加していただくためにはどうすればいいかといふ準備をやっていくといふ形になっていきます。皆さん日本語教師の資格をお持ちの方で、経験もたくさんお持ちなので、そういった意味では不安はないです。

■原委員

丹野さんのおっしゃったこととも重なるのですが、今、すごく暑いではないですか。8月は暑くて、9月も多分暑いので、それは影響するのかなと思う。あと、市民館やふれあい館の識字学級もそうですけど、単発で参加する人が多いわけではないですか。1回来て、また来なくて、また来てとか、続けてくる人が、私がやっていた頃は、入門者が特に少なかったから、今人数が少ないから、受付の側が承知していればある程度人数が来たら、例えば8人以上集まらないと講師の人が余ってしまうことにもなるので、10回参加といふのは、チェックしない雰囲気の方がいいのではないかと思ひます。本人たちも、もしかして自分は、この部分は勉強したいけど、もし多言語で情報が出てくれば、そういう選ひ方をする場合もあるかもしれないし、皆さんも、例えば週に3回行くといふ形になったら、完全に全く働いていない方ではないと10回いったら行けない感じになってしまうから、少しは仕事していたり、色々な子育てでだったりとかといふと、ハードルが高いかなと思ひます。少し緩やかにして、生徒を集めるといふ方がいいのではないかなと思ひます。

■吉留担当課長

御意見いただいたとおり、ちょうど8月、9月は暑い時期ですが、他の識字学級や日本語講座の学期の合間を狙って日程を組んだという経過があるというところと、その短い期間で集中的にやっ払いこうというところで、すみ分けをしたというところもござります。確かにおっしゃるとおり、暑い中、年代によっては行けないという人もいらっしゃるかと思うので、そこのところは、こちらはこちらで休みだなというぐらいの把握の感じで、心構えでいるのと併せて、今回平日ですので、家族滞在や仕事をしていない方、そういった方を念頭にアプローチをかけて今募集をかけている状況になりますので、まだ今、2人しか来ていないというところなのですが、今、まだまだ企業側のアプローチはまだできていないところもありますので、今後力を入れて広報していこうと考えています。

■吉田委員

保育をつけるとできますか。

■原委員

それは圧倒的にそうです。それは保育があればかなり違う。

■丹野委員

そこに預けられるからね。

■原委員

だから、予算があるのだったら、保育ができるとよいかと思います。

■南委員（部会長）

そうしましたら、次の議題に参ります。続いて、キャリアアップ講座について、事務局から説明をお願いいたします。

■廣田総括コーディネーター

（資料4）キャリアアップのための日本語講座について説明

■南委員（部会長）

ただいまの説明について、御意見、御質問があればお願いいたします。

■原委員

この講座の申込みもまたQRコードですか。

■廣田総括コーディネーター

こちら川崎市のホームページからオンラインフォームで申込みとなります。チラシにQRコードを貼り付けているので、そこから申し込むことも可能です。

■原委員

内容的に、N4以上の人でないと、やっ払いいけない内容になっているじゃないですか。想定と違う人が来た場合は、対応はどうなりますか。

■廣田総括コーディネーター

この講座は自立学習のやり方を学ぶ場にもなっていますので、どのレベルの方が来ても、オンラインツールの使い方などは満足していただけたと思いますが、期待をもって、例えばN3、N2ぐらいの方が来てしまうと、簡単な内容だということになりかねないと思います。ただ、この内容で勉強したいという方については、受入れをする予定ではあります。

■原委員

想定として、N3とN2とか高いレベルを目指している人が来たら、復習としてはいいと思うのですが、なかなか文字情報は、初期の人には、私はなかなか伝わらないと思っています。この講座の案内を見て、もっと初歩の人が来てしまった場合に、市民館とかふれあい館は誰が来ても受け入れるというのが、学級の在り方なのだけど、この講座の受付の時にN4レベルにも到達していない人が申込みをしてきた場合には、ど

ういうふうに対応するかは内部で検討されて決めておいたほうがいいのかと思います。来てから断るのは、失礼だし、来てしまったら受け入れるしかないのかなという気がします。あるいは、チラシとかにある程度明記するなどした方がよいかと。

最近、スタッフ募集とかはそういうときは、日本語能力試験、N2以上の方とか、そうやって多言語スタッフを募集するとき、表記することも多いと思います。だから、この講座の内容的にも、今でなくてもいいと思うのですが、検討されておいたほうがいいのではないかと思います。

■吉田委員

講師は外語ビジネス専門学校の所属の講師の方たちですね。そうすると、普段はレベルのそろった方たちにクラスをやっているということなので、私が関わっているゼロビギナーのほうは、講師の方たちが、もう来たら受け入れなければいけません、どんなレベルであっても、複数であってもというところで活動している方ですけど、こちらは違うので。そうすると、今、原委員がおっしゃったような、ある程度の幅のところのどの辺でということ、ちゃんと考えて呼ばないと、講師の方たちも面食らってしまわれると思います。そうすると事業の目的として何が目的なのか。それこそ幅を決めるとか、あるいは申し込む段階でN3、4の段階だったら何かチェックテストをやってもらって提出するとか。

■南委員（部会長）

神吉委員、いかがですか。

■神吉委員

基本的に今、日本語教育がやろうとしていることというのは、日本語教育の参照枠という大きな枠組みがあって、それを踏まえて社会的課題を解決することが学習の目標になるということだと思っています。

そういう観点からいったときに、例えば自己紹介ができるというのは、誰に、どういう場面で、誰に対して自己紹介ができることを想定しているのかとか、実際に自己紹介ができるかどうかというのは、リアルな文脈でどうやって判断していくのかというところが、この企画の文章からは読み取りづらいかなと思って見えていました。パソコンを使うというのが、「パソコンを使って何ができるよ」みたいなこと、つまり、その人たちはパソコンを使う必然性がどこかにあって、「こういうことができればいいよね」という。その辺がもう少し具体的になるといいのかなと思って見えていました。なので、1回目から5回目までの、それぞれの回の学習目標をもう少し社会的な観点から立てるといいのかなと思っています。例えば第5回だと日本語学習と仕事についての体験談の発表というのは、これはやることですね。これをやることによって何が学べるのかというのが明文化されるとより良いのかなと思いました。

■南委員（部会長）

今の御意見に対して事務局のほうで回答はありますか。

■吉留担当課長

神吉先生のおっしゃるとおり、今回、このキャリアアップに参加することで、何ができるかと、そこを前面に出していないと参加者も参加しづらいのかなと思いました。当初はターゲットを絞ったほうがいいのではないかと、ターゲットを絞ったほうがキャリアアップは分かりやすいのではないかと意見もいただいた中で、あえて今回は広いターゲット層に対して募集をかける形で考えています。内容としてはどの業種でも対応できる内容を考えてはいるのですが、参加することによって何ができるようになるのかを、もっと詰めなければいけないと思っています。それを出さないと、募集しても分からないで終わってしまうのではないかなと思います。委員から意見をいただいたとおり、何ができるようになるかを見せられるように考えていきたいと思っています。

■丹野委員

今どきの職場だったら、製造業の工場であったとしても、製造業は、さすがにパワーポイントは使わないと思います。プレゼンして何かするという感じではないから。だけど、エクセルは使える必要があると思

ます。何を何個作っているか、どれだけのものが不良品になってしまっているかなど、データをきちんと処理していくということが記録として残すという能力は、働いている人であつたら必要になると思うので、その点でいうと、パソコンを使えるというよりは、エクセルを使える方が良いかと、パソコンで日本語になると難しいではないですか。英語のエクセルと日本語のエクセルというところが違ってきます。やはり日本語固有のここにこの項目を入れるとか、会社とか事業所で必要なものはそういう能力ではないですか。パソコン一般を使えるというよりは、このソフト、このアプリケーションを使えるがよいと思うので、やはりエクセルが一番かなと思うのだけど、そういうものに絞って、表を作る、グラフを作るとかをしっかり最初にマスターしてもらおうというところから取っかかりをつくるというののかなと思います。それから業務日報を作れるようにするとか、何かそういうところですよ。

■吉留担当課長

そのように明確だと分かりやすいですね。

■丹野委員

そのほうがスキルアップとか、仕事に関連してというところがイメージしやすいと思いますし、それができるようにしますよということを労働者に分かってもらうよりも、雇用主や会社側の人たちに、この講座を受けてもらうと、業務日報が書けるようになるんだと理解してもらえれば、会社側も、行かせようということになってくると思うので、働く人からどう見えるのかということも重要なのですが、雇用主側からここに行かせてもいいのではないかと、むしろ積極的にここに行かせようと思えるような、これができるというものを示せたほうがよいような気がします。

■吉田委員

開始が18時になっていますけれど、対象者を考えると18時開始は結構厳しいのではないですか。30分でいいから遅くしたほうが通える方は増えるし、事業主の方も出してあげられやすいと思うので。もしできれば30分でいいので遅らせてみたらいかがでしょうか。

■廣田総括コーディネーター

当初は6時半からを設定していたのですが、内容的にボリュームがあるのと、せっかく来ていただくので2時間は実施したいというところと、会場の都合で8時半には撤収しないといけないという事情があります。

6時からということですが、受講者が遅れるということも想定しまして、6時半ぐらいから始まるということも鑑みてという設定になっております。

■吉田委員

先生たちの中で、 時間に来なかったらという形で今までやっているから、そのところも講師の方たちに想定して、内容を組み入れてもらって、メインの内容は6時半以降に始まるとか。

■廣田総括コーディネーター

そうですね。あと広報先にも関係団体、会社のほうに報告しますので、雇用主にもその辺りを少し考慮して仕事を終わらせていただけないような内容も盛り込めたらなと思っています。

■吉田委員

できるだけ来てもらうためには、あまりそこまで言わなくても良いのでは。間口広く来ていただいた方がよい。

■丹野委員

1回目は特に広く。

■南委員（部会長）

そうしましたら、続きまして、地域日本語教育スキルアップ講座、地域日本語シンポジウムについて、事務局から説明をお願いします。

■廣田総括コーディネーター

(資料5) 令和7年度川崎市地域日本語教育スキルアップ講座(案)

■吉留担当課長

(資料6) 令和7年度川崎市地域日本語教育シンポジウム(案)について説明

■南委員(部会長)

資料5、6の説明がありましたが、皆様から御意見、御質問などがありましたら、お願いいたします。

■神吉委員

資料5に関してです。既に進めていらっしゃると思うので、これで今年度行くのだと思うのですが、「日本語教育人材の養成研修のあり方」という資料が過去に当時の文化庁国語課から出ています。そこに、今、日本語教育を学ぶ上での必須の50項目というのがあって、領域分けがされています。そこを参考にして、市として経年で戦略的にどういうことをやっていくと、今の川崎市での支援者の足りない部分とか弱い部分とか、または学習者が求めている部分というのを埋めていけるのかというのが、これから立てられていくといいなと思いました。前回と今回、第二言語習得ということなので、次は社会的な観点とか、学習の観点とか、全体として経年で何かできるか。受講者の声も大事ですが、どちらかというと市として、こういう方向でいきたい、これに乗ってきてほしいことを、出せるといいかなと個人的に思ったところです。また今後の検討の参考にしてください。

■南委員(部会長)

ありがとうございます。では、吉田委員、お願いします。

■吉田委員

資料6のシンポジウムですけれども、シンポジウムというのは、普通、異なる視点を持った方たち何人かの話合いという形なので、神吉先生の基調講演に対して、色々な視点の方からの話合いというのが来るのかと思っていたら全然違うので、もったいないなと。しかも3年間の締めだったわけですね。

■南委員(部会長)

これはいかがですか、事務局としては。

■吉留担当課長

たたき台としてはつくっているところなのですが、その辺りも御意見をいただきたいと思っておりました。こちらの当初案は、あくまでも今回のゼロビギナーについての結果を聞きたいという声もあった中で企画ではあるのですが、パネリストを呼んで意見交換するという方法もあるので、こちらとしては、これでやりますというわけではなく、この場でアドバイスをいただければというところで、出したところになりますので、今いただいた意見も踏まえて考えていきたいと思っております。

■南委員(部会長)

考えていくに当たって、どういう場で誰に相談するつもりですか。

■吉留担当課長

もし、パネリストとかお声がけする場合に、どういった方がいたとか、そういったアドバイスをいただければと。

■吉田委員

まず、神吉先生と話した方がよいのでは。

■丹野委員

神吉さんがいて、できたら、歴代課長を並べて、前任の課長まで呼んで、行政がどう考えたのかというのを話すのはどうか。

■南委員(部会長)

神吉先生、シンポジウムの件について、お考えとか御意見ありますか。資料6で、シンポジウムの形でやったらどうかという意見が出ているのですが、先生としてお考えですとか、こうしたらどうかなど思っていることがあったらお願いします。

■神吉委員

私も目的とかを今日資料で初めて見たので、これから相談していくのかなと思っていたのですが、川崎はやはり歴史もありますので、今までの取組の歴史というのが踏まえられていること、そこからさらに現代的な課題も含めて、どう発展してきているのかという歴史的な縦のつながりと、それから、今回、色々な外国人が増えてきて、横にも広がっていくのだと思いますけれども、そういう全体像がうまく見える中で、課題をどう行政として解決していくのか、またはできていない部分があるのかというのが見るといいかなと思っています。3年間の総括で、こういうことができたよねということももちろんあると思いますけど、3年しかやっていないので、まだまだ課題もたくさんあると思います。次に向けて、これをみんなで頑張っているかなければねという前向きに、次につながるような形になるといいかな。僕も頑張るってそういう話ができるようにします。

■南委員（部会長）

この案は出たばかりという様子なので、また今後、色々御意見をお寄せいただいて、少しでも良いものになっていくように、皆さんの御協力をお願いしたいということでもよろしいですか。

■吉田委員

色々な方に登壇していただくということであれば、外国人市民代表者会議からも、どなたか出ていただくこと、その外国人市民の方に来ていただいて、代表者会議ではそういった問題についても話し合っていますから、せっかく音頭取りをするのであれば、そのメンバーもひとつ考えられるのではないかな。

■吉留担当課長

考えていきたいと思います。

■神吉委員

補足ですが、何か軸としては、言葉を学ぶということと、人権というようなことを、どうやって改めて現代的に捉えていくのかというのは1つ軸になる考えるべきところかなと思っています。

■南委員（部会長）

それでは、資料5、6については、以上とさせていただきます、議事の（3）今後の審議計画・スケジュールについて、こちらの件に移りたいと思います。事務局から説明をお願いいたします。

■吉留担当課長

（資料7）キャリアアップのための日本語講座について説明

■南委員（部会長）

ただいまの説明について、何か御意見ですとか御質問がありましたら、お願いいたします。

■丹野委員

今年はこれでまずやってみるということしかないと思うのですが、できたらゼロビギナーはどんどん間を開けないで、1期10回分が終わったら、2週間ぐらい空けて、もう次の回、この10回終わったなら2週間空けたら、次の回というような感じで、いくつもやっていったほうがいいと思います。というのは、外国人は毎月新しい人が入国して家族連れでやってきてしまうではないですか。特にゼロビギナーの人は4月に必ず来ているという人ではないので。その人たちは、来たときに捕まえるのが一番大事。入国して間もないときに、需要が一番あるので、そうすると、回数を多く持つ以外にそのニーズに対して応えるということではできないですから。しかも幸い二十何人も先生として手を挙げてくれた人がいらっしゃるわけでしょう。これを使わない手はないので。次年度は連続して予定を組んでしまうぐらいでやっていったほうがいいのかな

と思います。

■吉田委員

でも、既に各市民館等で1年中、いつ来てもゼロビギナーを受け入れています。そういう意味では、ゼロビギナーの人たちが身近なところで、それから自分に合う曜日を通えるということができるので、そこにさらに立てる必要があるのかなというのが気になります。

■丹野委員

そっちがきちんと機能するから、こっちはゆっくりでいいかもしれない。

■吉田委員

そちらのほうは、市民館は地域ごとにやっていますから、そこに入って、そこから今度は子どものところにつながりができたりとかしていく形でどんどん社会につながってっていくという、システムになっているので、教育委員会も入ってそういうことをやっていたらいい。それから国際交流センターも、受講者同士のつながりができて盛り上がり、それで何かイベントをお手伝いなさっている方がいたり、そういう形に発展していているので、そういう社会参加ということに結びついている。そこがあるから、それを大切にしていっていいのではないかなと思います。

■丹野委員

そっちにあるのだったらいいかも。

■廣田総括コーディネーター

今回、短期集中で行うということもありますし、ゼロビギナーはボランティアにとっては、非常に負担が大きいというのも伺っていますので、できるだけ回数を増やしたほうがいいというのは理想です。

■丹野委員

了解です。

■原委員

丹野さんのおっしゃったように、川崎市として2期のメンバーを公募するわけですね。どういう目標値を置いているかを、ここの部会は話し合っていく場だと思います。先日違う場所で、神吉先生と一緒にいる機会があり色々と思ったのですが、文部科学省の方針は、日本語の参照枠を浸透させていくというのが一番の中心課題なので、川崎市の市民館やふれあい館が培ってきた識字学級の理念は、私自身も関わってきたものなので大切と思っていますが、そのことだけをやっていくのでは、文部科学省の総合的な体制づくりに、特に地域日本語教育の在り方の根幹にはなっていないと思います。

そういう問題意識があって、ゼロビギナーを吉田さんが中心に講師を養成して場所づくりをやっていったのではないかなと思うので、私の私見では、川崎市が培ってきた色々な識字学級とか地域日本語教育はもちろん市民参加型のこととして重要ですが、それとは違う形で文部科学省が推し進めている日本語教育の参照枠でも、きちんとやる場所や成果を見せていかないといけないと思います。第2期の応募をやっていく焦点が薄れてしまうと思うので、そういった焦点は多文化共生推進課を中心に詰めていただいて、第2期で応募していく意義を打ち出していった方がいいのではないかなと思います。

助成金というのは目標値がはっきりしているのですが、目標値がないところで、文部科学省が応援してくれる時代ではないと思うので、川崎市として、それをどういうふうに分自たちの施策に生かしながら、総合体制を目指していくかということだと思います。参照枠だけが中心ではなくてもいいと思うのですが、先ほどの説明にあったように、やはり企業との連携が薄いですねということも出てくると思います。2期の応募に向けての中心課題は、市のほうで検討していただいて、色々な分野で関わっている委員の人たちが意見を寄せながらやっていくという形が、今回で3年間が終わって、次のステップで何をやっていくかは、重要ではないかなと私は思いました。

■吉田委員

今のお話に対してですが、私が中心になってゼロビギナー講座を考えていていないです。前の地域日本語教育コーディネーターが、自分がこういうのがあったらいいなものを作って、それを渡されたので、いくつか意見は言ったのですが、彼女の信念というものもあって、できたものです。

今日初めてこの資料を見たのですけれども、応募された実施計画書などに対する講評及び修正事項について、貴団体に対する講評で、「生活C a n d o用いたプログラムが特に重要な取組の1つと考えられる。したがって同様の首都圏内で先行して取組をしている千葉市の知識や経験を参考にすることを勧める」となっていて、今原さんのおっしゃったようなこともそうですし、そういった意味も含めてということ。ただ、部局の中で話し合いをされて作られた枠だと思うので、これを大きく変えるのは大変なことかなと思いますけれど、ただ、こういったことが文科省から講評として来ているのであれば、そのところは加味した方がよいと思います。

■南委員（部会長）

今、吉田委員から御指摘のあった、今日、急に追加で出てきたこの資料については、何か説明とか、今日の議事に関係するようなこととかがあるなら、少し付け加えていただけますか。

■松長根課長補佐

文部科学省の補助金については、前回の部会でお示した令和7年度の申請書に対して、国から修正の意見が来しました。

審査の順位としては、今回全国で58団体の応募があって、そのうち川崎市が42位という形で、昨年度は56団体で50位だったので、順位としては上がってはいますが、国の予算をオーバーした金額が全国から上がってきたため、順位に応じて補助金額の削減をしているという形で来ているところです。

■南委員（部会長）

先ほど説明があったスケジュールとか、今まで説明してきた事業など変更せざる得ないみたいなことは、この中にはないということでしょうか。

■松長根課長補佐

今のところ、金額が減ったからといって、すぐに事業を減らすとは考えておりません。4月の段階で金額の内示が出ていますけれども、それをもって事業をなくさないという方針でやっていこうと思っています。

■南委員（部会長）

それも含めて御意見がありましたら、お願いします。

■丹野委員

学校への進学を目的とした取組は対象とならないとなるのは、総務省の特別交付税の中に定住外国人支援に対する就労支援策というのが盛り込まれてしまっていて、そういう別の予算でついてしまっているものは、文部科学省では駄目という立っつけになっているのだと思います。

■原委員

それは確かにそうですね。それは承知しているのですね。申請として文科省のお金を新しい事業として、どう予算に使うかということと、以前に、神吉先生も、それは川崎市の特色ではないかとおっしゃってくれたと思うのですが、子供から成人、企業連携から広く総合体制を見せることは、別の全体を見せることは総合体制としては必要だと思います。ただ、文科省のお金を取ってやることについては、やっぱり成果を見せないといけないと思います。

■吉田委員

ここで、こういう目標値があって、それを定性評価で出せというのが書かれています。

■原委員

そのところに、地域日本語教育の推奨は、生活C a n d oを中心にした参照枠の推奨というのを書いて

ありますね。

■吉田委員

生活C a n d oにあまりより過ぎないでくださいというのは、文科省から言われたことで、日本語教育参照枠の中に生活C a n d oが一部入っているのだからという、そこの立てつけをきちんとしなさいと。

■原委員

ただし、川崎市のやり取りの中身については、もうちょっとうたってほしいと書いてあると思うのですが。私も誤解していて、吉田さんがそのことを中心となって、今この新しい講座、ゼロビギナーの講師を養成しながら進めているのだというふうに解釈してしまったかもしれません。

■南委員（部会長）

これを何々してほしいとか、こういうふうに努めてほしいとか、色々言われていることは誰の手によってどうやって反映されていく流れなのですか。

■松長根課長補佐

修正事項については、必須項目と努力項目があり、国で修正をまとめるための様式を準備しているので、それは市で作成をして国に提出する形となります。

■南委員（部会長）

提出はいつですか。

■吉田委員

6月20日

■松長根課長補佐

そうです、6月20日付けです。

■南委員（部会長）

分かりました。だから参考資料なのですね。

■原委員

今の状況について、神吉先生が全国的な状況を一番御存じなので、意見を伺ってみてはどうですか。

■南委員（部会長）

参考資料やスケジュールのところでは皆さんから御意見が出ているのですが、文科省からの修正事項について、今後の在り方ですとか、全国的な状況などを踏まえて、こういうことではないかみたいなお話をいただけたらありがたいのですけれども。

■神吉委員

色々な観点があると思うのですけれども、僕の興味関心というか、やはり専門でいくと、どうしても日本語教育のプログラムの部分ですので、②の内容についての3番、「日本語教育の参照枠」に基づく「生活C a n d o」活用のプログラムの開発・試行という辺りですね。この辺については、川崎市はまだ、全然ここに着手をしていないところだと思いますけれども、どこかのタイミングで、3年目で一区切りということもあるので、これの3分の2補助へ無理に進む必要はないとは思っています。2分の1でも行けるだろう、事業として進められるのであれば2分の1補助のままでいいと思うのですけれども、少しこの辺りを意識した中長期の計画というのが必要になってくるかなとは思っています。

あとは、修正事項の（4）の貴団体に対する講評の後に事業内容に関する修正事項というのがあって、その4番、「その他」というところに「総括コーディネーターの給与額が他団体と比較しても、高額と思われるため、この価格設定とされた理由を説明されたい」とありますけれども、理由は説明しようというのであれば説明していいと思いますけど、ぜひ、他所は安いのですというのを押し返していただきたいなと思っています。全体として相場観をつくっていくのはすごく大切だと思います。日本語教育の相場はほかの業種、

職種に比べて、全般的に低く抑えられがちなところがあるので、こういう走り出して、まだ数年という時に相場は固まってくると思うので、ぜひそこは川崎市として頑張っていたきたいと思っています。業界の発展と、それに伴う、そこで恩恵を受ける外国籍住民、それから地域住民の人たちのためにも、ここは頑張っていたいただければと思いますので、むしろ他所が出すのではないですかと、一言言っていただけるといいのかなと思っています。

■南委員（部会長）

ほかの皆様、いかがですか。

■国際交流協会 安藤交流事業課長

この貴団体に対する講評のところ、具体的に生活C a n d oのプログラムがあって、千葉市を参考にすることを勧めるとあるのですけれども、これは千葉市に情報収集される予定はあるのでしょうか。

■松長根課長補佐

千葉市に関しては、令和5年度に当時の国際交流協会事務局長と課長と事務局でヒアリングに行ったことがあり、そのときには、まだプログラムは開発中でした。今回指摘事項において、生活C a n d oのプログラムについて先行していると書いているので、改めて千葉市さんには話しをお伺いしたいとは思っています。

■国際交流協会 安藤交流事業課長

思っているところですか。

■松長根課長補佐

具体的なアポイントメントを取っているわけではないのですが、千葉市には聞きたいとは思っています。

■国際交流協会 安藤交流事業課長

分かりました。

■南委員（部会長）

ほかいかがですか。一旦よろしいでしょうか。

そうしましたら、これで議事は終わった形になりますけども、またその他ということで、事務局のほうから何かありますか。ほかになれば、以上をもちまして、令和7年度第1回地域日本語教育の推進に関する部会を終わらせていただきます。誠にありがとうございました。お疲れさまでした。